みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

趣旨説明：生活文化と生活財調査

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/1617

趣旨説明：生活文化と生活財調査

朝倉　敏夫

1 はじめに

2002年「日韓国民交流年」を記念して，国立民族学博物館において開催した特別展「2002年ソウルスタイル――李さん一家の素顔のくらし」は，ソウルに居住する「李さん一家」の家族成員の生活空間と，韓国社会に暮らす人々の一生を17のトピックスに分けて，現在の韓国社会の生活文化を表現した。

この特別展を総括，評価しようとすれば，大きく三つの次元から行うことができよう。第一は，特別展の目的とした日韓の相互理解にどれだけ資することができたかである。第二は，展示の次元である。展示学および博物館人類学の立場からの総括，評価である[1]。これには展示，資料（映像資料を含む）の収集，保存，社会教育のほかに，「みんぱくシヂャン（市場）」「みんぱくマダン（広場）」といった関連事業，広報活動なども対象とされるだろう。そして，第三は，研究の次元である。

本シンポジウムでは，この特別展を第三の研究の次元で総括，評価しようとするが，それは同時に，今回の特別展を通して，韓国研究および民族学にどのように貢献できたかを検証し，さらに今後の研究への指針を見つけだすものとしたい。

今回の特別展では，展示のための基礎研究として，ソウルに居住する一家族を対象とした生活財調査を行った。この「李さん一家」の三千数百点におよぶ生活財調査のデータ，およびそれに基づき収集された資料は，展示において最大限に活用され，現在のソウルに居住する一家族の生活財の記録であり，将来に向けてタイムカプセルとして保存される。しかし，これら貴重なデータ，資料は，展示，記録・保存に終わらせずに，研究に活用することが望まれよう。

そこで「李さん一家」の生活財調査によって得られたデータを中心に，韓国の物質文化研究者を招き，本館共同研究「韓国現代生活文化の基礎的研究」の共同研究員とともに，韓国社会における生活財調査による生活文化研究について議論してもらうことにした。

韓国からは，チプ（イエ）研究の方法論と民俗誌の新たな記述方法を模索していた物質文化研究者に来ていただいた[2]。日本側は，現代韓国社会における生活文化の研究を目的として組織した本館の共同研究「韓国現代生活文化の基礎的研究」のメンバーに参加いただいた[3]。彼らには，今回の特別展の展示について，その助言および図録の執筆を担当していただいた。

議論に入る前に，本シンポジウムの趣旨を述べるにあたって，まずは研究対象として

の「生活文化」と研究方法としての「生活財調査」という用語について，簡単に整理しておこう。

2 「生活文化」——研究対象として

まず，研究対象とする「生活文化」という用語である。この用語は，まだ辞書，事典などに独立した項目はなく，一般に明確な定義が示されていない。例えば，国会議員でつくる超党派の音楽議員連盟がまとめて国会に提案した「文化芸術振興基本法」では，芸術，芸能などのほか，「生活文化（茶道・華道・書道）」「国民娯楽（囲碁・将棋）」「身体文化（武道・相撲）」を対象分野とするとしているが，ここでは「生活文化」は，茶道，華道，書道を指している。

では，この用語が使用されたのは，いつ頃からであろうか。戦前は，文化の向上，発達，文化価値の実現を人間生活の至高目的とする「文化主義」の立場から使われていた[4]。しかし，圧倒的には，戦後，それも近頃になってである。もっぱら消費の局面が中心となり，「生活＝衣食住～消費生活～暮らし」と捉えられている。

この用語はまた，近年になって「生活学」「生活文化論」といった用語が大学で学科名，科目名として使われ始めた。そこには「家庭生活は地域文化の問題であり，地域文化は国家や国際社会の問題である。人間と文化の視点から生活を，生活から現代社会をとらえる視点が現在求められている」（河合利光編 1995『生活文化論』p.iii 建帛社）といった背景があろう。ことに「生活学」「生活文化」学部・学科への改称は，従来の家政学部・学科からのものが多くみられる。また，家政学会でも「生活学」「生活文化論」という分野が市民権を得てきている。生活の物質的な側面の理化学的研究に傾斜してきた家政学では，多様化し複雑化した現代の生活に充分には対応しきれず，生活の社会的および文化的側面の研究をとりこむという姿勢の現れであろう。

こうした大学でのテキストに書かれる「生活文化」の概念やその内容はどのようになっているだろう。多くの場合，「生活文化」は，「生活」と「文化」の二語から，その意味を規定しようとしている[5]。例えば，吉野正治は「衣食住，育児，家庭経営の仕方から自由時間の過ごし方までを含む生活の局面にかかる文化，そして文化とは特定の社会の人々によって習得され，共有され，伝達される行動様式ないし生活様式の体系」（日本家政学会 1991『生活文化論』p.2 朝倉書店），寺出浩司は「生命と文化の統合体としての人間生活そのもの」（寺出浩司 1994『生活文化論への招待』p.47-48 弘文堂）と規定する。また，石川実は「人類学者の文化の概念を参照しながら，文化内容を具体的に類別し，その上で文化一般のなかでとりわけて「生活文化」と呼ばれる領域をもう少し吟味し，具体化して囲みこむことで，生活文化の内容を示す一つの指針を提示している（石川実・井上忠司 1998『生活文化を学ぶ人のために』世界思想社）[6]。

さて,「生活文化」という用語は,英語に翻訳するとどうなろうか。直訳的に Life Culture あるいは, Living Culture, Everyday Life Culture とすると,ここで議論される「生活文化」という語とは語感が違うようである[7]。ところで,日本語を英語訳するのではなく,英語の日本語訳であるが,ユリウス・リップスの『The Origin of Things』というタイトルの本が『生活文化の発生』と翻訳されている(大林太良・長島信弘訳 1964, 角川新書)。この things, すなわち「もの」を生活文化と翻訳したことは興味深い。生活文化の研究は,「もの」の研究と密接な関係をもつからである。

「もの」については,文化人類学の立場から編集された『「もの」の人間世界』(1997, 岩波書店)という著作がある[8]。その序「ものと人から成る世界」で,内堀基光は次のように述べている。「回顧的にいえば,家屋の造り,人びとの着ているもの,食べ物からはじまるこれらのいわゆる『物質文化』は,文化人類学と民族学にとって古くから中心的課題であった。『もの』は文化を構成する中核とみなされていたのである。こうした見方は世間一般における『文化』という言葉の理解とそう隔たってはいない。だが,おそらく 1960 年代以降の文化人類学においては,文化にとって構成的なものとしての『もの』という観点は,消え去ることはないまでも,はるか後方に押しやられてしまったようにみえる。その原因としては,いっぽうには人類学における部下概念の抽象的洗練化があり,もういっぽうには世界大に展開した文化の――とりわけ「もの」の文化の――均質化という現象がある。文化概念の洗練化によって「もの」は見えざる文化システムの単なる乗り物のようにあつかわれ,また文化の世界的均質化にともない,ローカルな物質文化の魅力は急速にうすれてしまったのである。このふたつの原因を関連づけていえば,そこには有効性を失った『もの』的な文化エッセンシャリズムから抽象的コード体系としての文化エッセンシャリズムへの転換があったということになろう。今われわれがふたたび『もの』へと視線を向けようとするのは,けっしてかつての『もの』的エッセンシャリズムへと回帰しようとするからではない。それどころか人間世界における『もの』は,ほかのなによりも否定しがたいかたちで文化の境界を越え,しかもそれでいて,既存の文化境界を越えるときには,すくなからぬ意味の変容をこうむっていく。こうした『もの』の特性を認識することによって,人間文化というものの,混淆的でありながら個性化を内在する成り立ちの様相を探ろうとするのである。世界的規模での消費社会の出現をまえにして,あらたな意味での『物質文化』への接近が招来されているのだ(Journal of Material Culture, 1996 : 創刊号巻頭言参照)」(内堀 1997: 4-5)とある。すなわち現代社会における「もの」研究の新たなアプローチの必要性が述べられている。そして,私たちの展示も,こうした脈絡の中で考えられたものである。

以上,「生活文化」という用語に着目して,日本における「生活文化」の研究,それと関連する「もの」,物質文化の研究の動向について概観してみた。

では,韓国の状況はどうであろうか。私の知る限りでは,1990 年代以降に社会史,生

活史への関心が高まり，1995年前後から関連書籍が多く刊行されるようになった。また，物質文化に関しても，1997年に生活民具学会が発足し，機関誌『生活民具』が刊行されはじめた。今回のシンポジウムにおいて，韓国の状況について紹介していただければと思っている。また，韓国語でも「生活文化」という用語がそのままに通用されると思うが，韓国ではどのように概念を規定し，あるいはその用語が示す内容について，お教えいただければと考えている。

3 「生活財調査」——研究方法をめぐって

今回の展示の基礎となったのは生活財調査である。そして，この調査法の背景にあるのが考現学である。

日本の都市社会の近代化が本格的に進んでいった1920年代，急激に変化していく都市風俗の調べものを始めた今和次郎が，一連の調べものに対して考現学（Modernology）と命名したのが，1927年の「しらべもの展覧会」においてであった。「この展覧会は，ここ三年間私達のやった仕事の展示です。かかる仕事を私達は仮に考現学と称して，考古学でやる方法を現代に適応してみているのです。即ち現在眼前に見るいろいろのものを記録し，そのしらべの方法をどうやったらいいかに就いて努めている次第です」（今和次郎『考現学』p.495ドメス出版）と，考現学は生活の調べものの方法として，まずは考古学との対比のなかで構想された。

今和次郎は，街頭での風俗に関心を向けるとともに，家庭内の生活財にも目を向けている。「下宿住み学生持物調べ（Ⅰ）」（25年），「同（Ⅱ）」（25年），「新家庭の品物調査」（26年）にまとめられていった家庭内もちもの全品調査がそれである。「その人の所有品はその人の生活全部の背景をなしている」（今和次郎 1926「新家庭の品物調査」）として，その全品を調べあげることによって，その人なり家庭の生活上の性格や傾向を明らかにできるとし，各地方あるいは各階級についてこのような調査を積み重ねていけば，各地方そして各階級の生活ぶりの違いを具体的に浮かび上がらせることができると主張した。

こうした今和次郎の考え方を展開させたのが「生活財生態学」である。この調査法を主導した正田は，「『生活財生態学』という名前をつけて，われわれが現代日本の生活について共同研究を開始したのは，1975年の3月であった。『生活財』とは，生活のために人びとが所有しているモノのことである。農村や漁村であればその中に生産財も入ってくるであろうが，われわれが調査対象にしたのは現代都市家庭であるから，この場合ほとんどすべてが消費生活の道具である。当初われわれは，家庭に入ったあとの商品，と考えたが，家庭に入ったあとは『商品』と呼ぶのがそもそも矛盾であろう，とべつのよび方をすることにした。『家財道具』とか『持ち物』とか，いろいろ考えたが，消耗品から耐久品，大きな物から小さな物まで，すべての家庭生活用品を包括する概念として，『生

活財』と呼ぶことにした」（疋田正博 1986「モノから暮らしを見る」中鉢正美編『生活学の方法』p.151）という。その成果は，『生活財生態学――現代家庭のモノとひと』（商品科学研究所＋ＣＤＩ 1980）などとして刊行されている。

この生活財生態学では，その目標は，階層や地域におうじた日本社会の平均的イメージを抽出することにあった。しかし，今回の特別展の基礎となった「李さん一家の調査」は，それとは違った目標が設定された。この調査を行った佐藤は，「生活財調査の目的は，人間が行きてゆく過程で身のまわりに集めたものを可能なかぎりしらべあげ，そのひとつひとつに持ち主のこめた意味をあきらかにしてゆくことにあった。つねに個性的な存在として人間を描こうとした今和次郎の原点にふたたびたちかえったといってもよい」（佐藤浩司 2002「生活財調査――ものはなにをかたる」朝倉敏夫・佐藤浩司編『図録2002年ソウルスタイル』pp.104-105）と述べる。

そして佐藤は「展示のテーマはずばり『韓国』と『家族』。――中略――家族のひとりひとりが固有の時間と空間をもち，アパートの部屋をたがいの結節点にしながらまわりの世界にのりだしていく。そのような関係のもちようを，韓国でも日本でもない，ともにおなじ現在をあゆむ『家族』とみなそうとした。文化や民族について論じるまえに，自分について知りたい，身近な人間について知りたいとのぞむ。そこから個々人の問題を組み立ててゆく以外に，未来にひらかれた異文化理解はないのだとおもう」（佐藤浩司前掲書 p.15）と述べている。

「李さん一家の調査」は『家族』をテーマとして展示し，また議論するには，これまでに例をみない成果をもたらしたといえよう。しかし，もう一つのテーマ「韓国」について，この「李さん一家の調査」を活用するには，さらにさまざまな角度からの指摘，議論が求められよう。今回のシンポジウムの目的は，「李さん一家の調査」を韓国研究にどのように活用できるか，その道を探ることにある。

4 シンポジウムでの議論

そこで，今回のシンポジウムでは，以下のような点について議論したい。

1）「李さん一家」の調査データの相対化

今回の調査から何がわかったのか，韓国研究者による韓国の他の事例との比較を通して，さらに深い洞察をすることができよう。また，そうした議論をふまえて，今回の調査をさらに継続的に行うことによって調査データを充実させることができるにちがいない。

2）生活財調査と韓国社会研究

「李さん一家」の調査の有用性と限界を明らかにする。そのことによって，今後の韓国社会研究における生活財調査の参考とする。また，例えば階層や地域に応じた韓国社会の平均的イメージを抽出する韓国版「生活財生態学」調査の可能性も検討できないか。

3）グローバル化と生活文化

現代は，働くことで自身の生活を充足させれば済む時代ではなく，産業化による環境破壊，資源の枯渇など地球規模の変動が直接的に日常の生活に影響を与えかねない。しかも，その生活は他国との間に複雑に張り巡らされた相互依存のネットワークの上に築かれており，他国の情勢が自国の生活に深刻な影響を与えることもある。人間と文化の視点から生活を，生活から現代社会をとらえる視点が求められている。こうしたグローバル化の中にある大衆消費社会における生活文化をどのように捉えていくか。ことに，サブカルチャーを中心にハイブリッド化が進む日本と韓国，両国の文化を従来の二項対立とはちがったモデルで捉えることが，今回の調査を通して検証できないか。

最後に，本館の雑誌『民博通信』に，国立歴史民俗博物館の篠原教授が博物館で行われる研究を「を」と「で」と「も」の三つに分類している[9]。「を」の博物館研究とは，まさに博物館そのものを研究する立場。「で」の博物館研究は，最も中核的なもので，ここで中心となるのが広義のモノ資料である。そして，「も」の研究は，博物館のスタッフになってから，博物館資料「も」使ってなんとか博物館らしさを糊塗するしかない研究である。私自身は，まさにこの第三の立場にあり，モノ資料とはきわめて遠い存在にあったが，常設展のリニューアルから今回の特別展へと，モノ資料に近づき，モノ資料「も」研究するようになった。モノ資料を通して生活を，そして生活から現代社会をとらえる視点が求められていると考える。

5 おわりに——シンポジウムの進め方

シンポジウムは議論を深める場にしたいと思う。一つのセッションを60分とし（休憩時間まで組み込めば10分くらい延長可），発表者は，話題提供の形で20分程度の発表をし，残りの時間で討論できるようにする。

座長は討論を深められるよう議論を整理しつつ進行する。議論の時間が足りなければ，総合討論にまわすことにする。

参加者は，時間の都合などで，その場で話せなかった意見，質問や，総合討論で議論すべき項目について，用紙を用意するので，それに記入の上，提出する。

では，活発な議論をお願いします。

注

1) 「展示の評価――2002年ソウルスタイル」は，2002年10月16日の本館研究懇談会において行われる予定である。

2) 「チプ研究会」は，今回の特別展を契機として，日本の生活財生態学を韓国に適応させ，韓国の生活文化を研究するための集まりとして2000年7月に結成された。その名称の由来と活動は以下のようである。

韓国語の「チプ」という言葉は，おおむね二つの意味をもっている。まず寒さや暑さ，風雨などをよけるために建てた物理的構造物を示すとき使われる。もう一つの意味ではチプは人が成し遂げる最も最小限の単位である家族が生活する空間である。したがって「チプ」は家族を入れる単純な物理的構造物であるのみならず，家族が属している文化の多様な姿を反映してくれる文化的空間である。すなわち「チプ」は住まい（housing）という建築物と，その構成員を示す家口集団（household）を同時に意味する言葉である。

したがって「チプ」についての研究は，物理的構造物であるチプとその中のもの，そして家口集団の暮らしについて総合的に調べることができる長所をもっている。同時に従来服飾学，食品学，建築学，民俗学，人類学などで各自の視角で研究してきたチプについての研究傾向を一つの三次元的な空間の中に総合化できるようにするためには「チプ」という用語が適切だと考える。またミクロ的な生活文化についての研究でも，「チプ」という主体が社会を構成している最も基礎となる単位という点でも有用な研究対象になる。「チプ」と関連した学問分野の研究主題には，おおむね衣生活，食生活，住生活，家族関係，宗教信仰，儀礼生活などがある。ところでチプという空間の内で家口集団の構成員たちはこうしたそれぞれの生活を同時に運営している。したがって「チプ」についての総体的な研究のためには，上の研究主体と関連した学問が学際的研究をする時のみ正しく研究できる。

そこでチプ研究会は，チプという空間の内で【空間＋人＋もの】の文化的メカニズムがどのように相互作用するのかについて主に研究した。チプ研究の最も基礎的な学問傾向は人類学と民俗学が堅持するfieldworkを通してである。特に同じ文化圏あるいは異なる文化圏の間の類似したり相違するチプについての【空間＋人＋もの】を通した比較研究は，特定のチプが属する文化圏の社会文化的意味を明らかにするのに適切な研究方法と信じる。ことにfieldwork資料を前におき，共同で分析する作業は「チプ研究会」がもつ最も大きな長所の一つである。

3) 共同研究会「韓国現代生活文化の基礎的研究」の目的は，以下のようである。

これまで日韓両国の間では，それぞれの歴史文化の研究はおこなわれてきたが，現代社会における生活文化の研究，および理解はほとんど進んでいない。2002年が両国政府によって「日韓国民交流年」と規定され，この年に本館と韓国国立民俗博物館が相互に生活文化展を共同開催することは，日韓両国の文化交流と相互理解にとって意義深いことである。本研究は，この展示のための基礎的研究を目的としている。同時に本研究は，韓国社会における高度経済成長下の人類学的研究，および「もの」を通してみた朝鮮民俗文化という，これまでの本館の共同研究の成果をふまえて，現代韓国社会の生活文化を，衣食住を中心として多角的な方向から調査・記録し，従来にはなかった韓国社会研究の基礎的データベースを構築しようとするものである。このことは日韓両国の生活文化の同質性や異質性を明らかにするとともに，韓国社会における日本大衆文化の開放をはじめとする日韓両国間に横たわる文化的諸問題に対して，新た

な視座を求めることができると考える。

4) シンポジウムにおいて，李文雄教授より，「生活文化」という用語について，三木清が昭和 16 年 1 月の『婦人公論』に「生活文化と生活技術」というタイトルで文章を書いているということを教えていただいた（『三木清全集』第 14 巻，岩波書店，1967 に所収）。

5) 「生活」という言葉を辞書で引くと，生きて活動すること，生物が生きていく日常の営みという意味と，くらしをたてることという意味がある。すなわち，前者は「生きている」「たくましく生きてゆく」というように基本的欲求に対応する生理的部分であり，後者は「うまく生きてゆく」「よく生きてゆく」というように文化的欲求に対応する社会的・文化的部分をもつ。人間の生活は，この二つの要素の統合体である。「生活文化」という用語は，「生活」という言葉の中に取り込まれている「文化」の要素を強調したもの，あるいは「文化」を生活の社会的・文化的側面を指すものとすれば，それは「生活」における後者の意味と同義になってくると考えられる。

一方，「文化」という言葉は，文化人類学においては「生活様式」を総称して用いられることが多いが，用い方にはいくつかの種類がある。第一のものは包括的な捉え方で，「社会の成員としての人間が獲得した知識，信仰，道徳，法，慣習その他あらゆる能力と習慣を含む複合的な全体のことである」というタイラーの古典的な定義に遡る。その後，このタイラーの定義を「文化の財産目録の羅列にすぎない」と批判し，「文化は歴史的に創造された生活様式である」とみたクラックホーン，文化の機能分析をおこなったマリノフスキーやラドクリフ=ブラウンらを経て，多くの人類学者たちによって「文化」の分析が行われてきた。そこには，包括的な捉え方以外に，文化を自然環境に対する適応体系として見る捉え方，文化を観念体系として捉える立場，文化を象徴体系として捉える立場などがある。ここではこれについてはふれないが，「生活文化」の用語が使われる時は，もっぱらタイラーやクラックホーンの定義を借用し，包括的な捉え方で文化を捉えているようである。

6) 石川の提示した「生活文化」の具体的内容は以下のようである（石川実 1998: 11）。

(1) 非形象的生活文化：①地域独特の土着思想，②国語・方言（単語）・イントネーション，③土着信仰，④生活の知恵，⑤技能・芸能・舞踊（形象化された作品を除く）

(2) 形象的生活文化: (2)-1 身体的形象＝①自己表現としての身体加工（たとえば，化粧），(2)-2 表象的・造影的・造形的形象＝①民謡，②工芸品，③道具，④工具，⑤建築物など

(3) 制度的生活文化：①ジェスチャーや身振り，②行動様式（歩き方，座り方，視線など），③日常的慣習（たとえば，一日に何回の食事を摂るのを通常とするか，食材の選択，調理法，使用食器，盛り付けなどの供し方，食べ方，衣材そのほかの着装材や寝具の選択，裁ち方，縫い方，仕立て方，着装の仕方，居住様式など），④マナー・エチケット（挨拶などの礼儀作法，贈答習慣，年中行事，通過儀礼，冠婚葬祭行事とそれに伴う贈答儀礼など），⑤おとなや子どもの遊びに関わる習慣，⑥関係様式（協力・協働様式，上下関係，対面的関係における物理的距離や位置のとり方，感情表現のパターンなど），⑦地域内や家庭内における地位配分と役割の設定，⑧組織化の原理や集団の形（家族関係や家族構成の形や運営方法），⑨地域共同体構成の形や運営方法，⑩種々の集団など

今回の特別展においては，「みんぱくシヂャン」「みんぱくマダン」も含めて，こうした様々な内容をもつ「生活文化」の展示を試みた。

7) Minpaku Anthropology Newsletter の本シンポジウムの紹介記事では，quotidian culture と訳した。

8) 民俗学の立場からも最近，印南敏秀・神野善治・佐野賢治・中村ひろ子編『もの・モノ・物の

世界――新たな日本文化論』雄山閣，2002年が刊行されている。

9) 篠原徹　2000「ミュージアム・ショップの考現学」『民博通信』88: 4-20。

취지설명 : 생활문화와 생활재조사

朝倉 敏夫

1 머리말

2002 년「일한 국민 교류의 해」를 기념하여, 본관에서 개최한 특별전 「2002 년 서울 스타일——이선생님댁의 살림살이를 있는 그대로」는, 서울에 거주하는 「이 선생님 일가」의 가족 구성원의 생활공간과, 한국인들의 삶을 17 개의 토픽으로 나누어 현재의 한국 사회의 생활문화를 표현했다.

이 특별전의 총괄 및 평가는 크게 세가지 차원으로 나누어 말할 수 있다. 첫번째는 특별전의 목적인 일한의 상호 이해에 얼마만큼 기여했는가에 있다. 두번째는 전시의 차원이다. 즉 전시학 및 박물관 인류학 입장에서의 총괄평가이다 [1]. 이것은 전시 자료 (영상 자료를 포함) 의 수집, 보존, 사회교육 및 「민박시장」, 「민박마당」 등의 관련 사업, 홍보활동 등도 대상에 들어간다. 그리고 세번째는 연구차원이다.

본 심포지움에서는 이러한 특별전을 제 3 의 차원에서 총괄, 평가하려고 하는데, 그것은 동시에 이번 특별전을 통해 한국연구 및 민족학에 어떠한 공헌이 가능한가를 검증하며 나아가 앞으로의 연구 지침이 될 수 있는 계기가 될 수 있기를 바란다.

이번 특별전에서는 전시를 위한 기초연구로서 서울에 거주하는 일가족을 대상으로 생활재 조사를 실시했다. 이러한 「이 선생님 일가」의 삼 천수 백 여점에 이르는 생활재 조사 데이터 및 그에 따른 수집자료는 전시에 최대한 활용 되었으며, 현재 서울에 거주하는 일가족의 생활재 기록이기도 하다. 그러한 자료는 미래를 위한 타임캡슐로서 보관되어지며 또한 전시, 기록・보존으로 끝내는 것이 아니라, 앞으로의 연구에 더욱 활용시켜 나가야 할 것이다.

이번 심포지움에서는 「이 선생님 일가」의 생활재 조사에 의해 얻어진 데이터를 중심으로 한국의 물질문화 연구자를 초대하여, 본관 공동연구 「한국 현대 생활문화의 기초적 연구」의 공동연구원들과 함께 한국사회의 생활재 조사에 의한 생활문화 연구에 대해 논의하기로 하였다.

한국에서는, 집연구의 방법론과 민속지의 새로운 기술 방법을 모색하고 있는 물질문화 연구자를 초대하기로 했으며 [2], 일본에서는 현대 한국사회의 생활문화연구를 목적으로 조직된 본관 공동연구「한국 현대 생활문화의 기초적연구」멤버가 참가하였다 [3]. 양쪽 연구자에게 이번 특별전에 관한 조언과 함께 도록 집필을 부탁하기로 했다.

논의에 앞서 본 심포지움의 취지를 논하는데에 있어 우선 연구 대상으로서의 「생활문화」와 연구방법으로서의「생활재 조사」라고 하는 용어에 대해 간단히 정리해 두고자 한다.

2 「생활문화」——연구 대상으로서

우선 연구대상으로서의 「생활문화」라는 용어가 있다. 이 용어는 사전등에 독립되어 있는 항목이 아니라 일반적으로 명확한 정의가 되어 있지 않다. 예를 들어 국회의원의 초당파 음악의원 연맹이 정리하여 국회에 제안한 「문화예술 진흥 기본법」에서는, 예술, 예능 이외에 「생활문화(茶道·華道·書道)」, 「국민오락 (바둑·장기)」, 「신체문화(무도·스모)」를 대상 분야로 하고 있으나, 여기서의 「생활문화」는 茶道·華道·쏟튑를 가르키고 있다.

그렇다면 이 용어가 사용되기 시작한 것은 언제부터일까. 제 2 차세계대전 전에는 문화향상, 발달, 문화가치의 실현을 인간생활의 지고 목적으로 하는 「문화주의」 입장에서 사용되었다[4]. 그러나 제 2 차세계대전 후, 그것도 최근에 압도적으로 사용되어지고 있다. 무엇보다 소비국면이 중심이 되어 「생활 = 의식주~소비생활~삶 (생활)」로서 파악되어지고 있다.

이 용어는 또한 최근들어 「생활학」, 「생활문화론」이라는 용어로서 대학의 학과명, 과목명으로 쓰여지기 시작했다. 거기에는 「가정생활은 지역문화의 문제이며, 지역문화는 국가와 국제사회의 문제이다. 인간과 문화의 시점에서 생활을, 생활로부터 현대사회를 보는 시점이 현재 요구되어지고 있다」 (河合利光編 1995 『생활문화론』 p.iii 建帛社) 라는 배경이 있기 때문일 것이다. 특히 「생활학」, 「생활문화」 학부 · 학과에의 개칭은 종래의 가정학부 · 학과에서 비롯된 것이 많다. 또한 가정학회에서도 「생활학」, 「생활 문화론」이라는 분야가 시민권을 얻고 있다. 생활의 물질적인 측면의 이화학적연구에 치우쳐져 있던 가정학은 다양화되어지고 복잡해진 현대생활에 충분히 대응하지 못한 점을 고려하여, 생활의 사회적 및 문화적 측면의 연구에 착수하고자 하는 자세를 보이고 있는 것이다.

이와 같은 대학의 텍스트에 쓰여져 있는 「생활문화」 개념과 내용은 어떤 것일까. 대부분의 경우, 「생활문화」는 「생활」과 「문화」라는 두개의 의미로부터 규정되어져 있다[5]. 예를 들어 吉野正治는 「의식주, 육아, 가정경영의 방법에서부터 자유시간을 보내는 방법까지를 포함하는 생활국면에 이르는 문화, 그리고 문화는 특정사회의 사람들에 의해 습득되어지고 공유, 전달되는 행동양식 내지생활양식의 체계」 (일본가정학회 1991 『생활문화론』 p.2 朝倉書店), 寺出浩司는 「생명과 문화의 총합체로서의 인간생활 그 자체」(寺出浩司 1994 『생활문화론에의 초대』 p.47-48 弘文堂) 로 규정한다. 또한 石川実는 「인류학자의 문화 개념을 참조하면서 문화내용을 구체적으로 분류한 후, 문화 일반 안에서 특히 「생활문화」로 불리는 영역을 조금 더 음미하여 구체화시킴으로서 생활문화 내용을 나타내는 하나의 지침을 제시하고 있다 (石川実·井上忠司 1998 『생활문화를 배우고자 하는 사람을 위하여』 世界思想社)[6].

그렇다면 「생활문화」라는 용어를 영어로 번역하면 어떻게 나타낼 수 있을까. 직역하면 Life Culture 또는 Living Culture, Everyday Life Culture 나 여기서 논의하는 「생활문화」용어와는 어감이 틀려진다[7]. 그럼 일본어를 영어로 번역한 것이 아닌, 영어를 일본어로 번역한 것에 Julius. E. Lipes 의 "The Origin of Things" 라는 타이틀의 책이 「생활문화의 발생」으로 번역되어 있다 (大林太良·長島信弘訳 1964 角川新書). 여기서 Things, 즉 「사물」을 생활문화로 번역한 점이 흥미롭다. 생활문화 연구는 「사물」연구와 밀접한 관계를 갖기 때문이다.

「사물」에 대해서는 문화인류학의 입장에서 편집된 『「사물」의 인간세계』(1997 岩波書店) 라는 저서가 있다[8]. 그 저서의 서장에는 「사물과 사람으로 이루어진 세계」로서, 内堀는 다음과 같이 서술되어 있다. 「회고적으로 말한다면, 가옥을 짓는 일, 사람들이 입고 있는 옷, 음식을 비롯한 이러한 『물질문화』는 문화인류학과 민족학의 오래된 중심적인 과제였다. 『사물』이 문화를 구성하는 중핵으로 간주되어 왔던 것이다. 이러한 견해는 세속 일반의 『문화』라고 하는 말과 그다지 차이를 보이지 않는다. 그러나 아마도 1960 년대 이후의 문화인류학에 있어서는, 문화에 있어 구성적인 것으로서의 『사물』이라는 관점은 사라지지는 않았으나 뒷전에 밀려 사라져 버린 것 처럼 보인다. 그 원인으로서 한편으로는 인류학에 있어서의 부하개념의 추상적 세련화가 있고, 또 한편으로는 세계적으로 전개된 문화의 ——특히 「사물」의 문화의 ——균질화라는 현상이 있다. 문화 개념의 세련화에 의해 「사물」은 보이지 않는 문화시스템의 단순한 승차물처럼 취급되어졌으며, 또한 문화의 세계적 균질화에 의해 로컬적인 물질문화의 매력은 급속히 희미해져 버린 것이다. 이 두가지 원인을 관련시켜 본다면, 거기에는 유효성을 잃은 『사물』적인 문화 엣센셔리즘으로부터 추상적 코드 체계로서의 문화 엣센셔리즘의 전환이 있었다고 볼 수 있다. 지금 우리들이 다시 『물건』으로 시선을 돌리려고 하는 것은 절대 예전의 『사물』적 엣센셔리즘으로의 회귀가 아니다. 오히려 인간세계의 『사물』은 다른 무엇보다도 부정할 수 없는 형태로서 문화 경계를 초월하여, 게다가 그것만으로도 기존의 문화경계를 넘을 때는 적지 않은 의미 변용을 받는다. 이러한 『사물』의 특성을 인식함으로서 인간문화라는 혼란스러우면서도 개성화를 내재하여 이루어지고 있는 양상을 찾으려고 하는 것이다. 세계적 규모의 소비사회 출현을 앞에 두고 새로운 의미로서의 『물질문화』로의 접근이 초래되고 있는 것이다 (Journal of Material Culture, 1996 : 창간호 권두언 참조)」(内堀 1997: 4-5). 즉 현대사회의 「사물」연구의 새로운 접근 필요성이 서술되어져 있다. 그리고 우리들의 전시도 이러한 맥락 안에서 생각되어진 것이다.

이상으로 「생활문화」라는 용어에 착목하여 일본의 「생활문화」연구, 그것과 관련하는「사물」, 물질문화연구의 동향에 대해 개관해 보았다.

그럼, 한국의 상황은 어떠한가. 내가 알고 있는 바로는 1990 년대 이후에, 사회사, 생활사의 관심이 높아졌으며, 1995 년 전후부터 관련 서적이 많이 간행되었다. 또한

물질문화에 대해서도 1997 년에 생활 민구 학회가 발족되어, 기관지『생활민구』가 간행되기 시작했다. 이번 심포지움에서 한국의 상황에 대해 소개해 주기를 바란다. 또한 한국어도「생활문화」라는 용어가 그대로 통용되어지고 있다고 생각되나, 한국에서는 어떻게 개념을 규정짓고 있으며, 또한 그 용어가 나타내는 내용에 대해 가르쳐 주기를 바란다.

3 「생활재 조사」——연구대상에 대해

이번 전시의 기초가 된 것은 생활재조사이다. 그리고 이 조사법의 배경에 있는 것이 고현학이다.

일본 도시사회의 근대화가 본격적으로 진행된 1920 년대에 급격히 변화하는 도시풍속을 조사하기 시작한 今和次郎가, 일련의 조사에 대해 고현학 (Modernology) 이라고 명명한 것이 1927 년의 「조사물건 전람회」에서였다.「이 전람회는 3 년동안 우리들이 행한 일의 전시입니다. 시행한 일을 우리들은 가정적으로 고현학으로 칭했으며, 고고학의 방법을 현대에 적용시켜 보고 있습니다. 즉 현재 눈앞에 보이는 여러가지 물건을 기록하여, 그 조사 방법을 어떻게 하면 좋을까,에 대해 노력하고 있는 것입니다」(今和次郎「고현학」p.495 도메스 출판) 라고 했으며, 고현학은 생활조사 사물의 방법으로서, 우선 고고학과의 대비 안에서 구상되었다.

今和次郎는, 거리의 풍속에 관심을 갖는 것과 동시에, 가정 내의 생활재에도 눈을 돌렸다.「하숙생 사물조사 (Ⅰ) 」 (25 년),「동 (Ⅱ) 」 (25 년),「신가정의 사물조사」 (26 년) 에서 정리되어진 가정 내의 사물 전품 조사가 그것이다.「그 사람의 소유품은 그 사람의 생활 전부의 배경을 지니고 있다」(1926 「신가정의 사물조사」p.347) 라고 함으로서 그 전품을 조사하여 그 사람 내지 가정 생활상의 성격과 경향을 밝힐 수 있다고 했으며, 각 지방 또는 각 계급에 대해 그러한 조사를 해 나간다면 각 지방그리고 각 계급의 생활상의 차이를 구체적으로 드러낼 수 있다고 주장했다.

이러한 今和次郎의 생각을 전개 시킨 것이「생활재 생태학」이다. 이 조사법을 주도한 疋田는,「『생활재 생태학』이라는 이름으로 우리들이 현대 일본 생활에 대해 공동연구를 개시한 것은 1975 년 3 월이었다.『생활재』란, 생활을 위해 사람들이 소유하고 있는 물건을 말한다. 농촌이나 어촌이라면 그 안에 생산재도 들어갈 것이나 우리들이 조사 대상으로 한 것은 현대 도시 가정이므로 이 경우 거의 전부가 소비생활 도구이다. 당초 우리들은 가정에 들어간 후의 상품, 이라고 생각했으나 가정에 들어간 후에『상품』으로 부르는 것은 모순이라고 생각하여 다른 명칭으로 부르기로 했다.『가재도구』,『소지품』 등 여러가지 생각했으나, 소모품에서 내구품, 큰 사물에서 작은 사물에 이르기까지 전부 가정생활 용품을 포함하는 개념으로서『생활재』로 부르기로 했다」(疋田正博 1986「사물으로부터

생활을 본다」中鉢正美편『생활학의 방법』p.151) 라고 했다. 그 성과는 상품과학연구소+CDI 1980『생활재생태학——현대 가정의 물건과 사람』등으로 간행되었다.

이러한 생활재 생태학의 목표는 계층과 지역에 따른 일본사회의 평균적 이미지를 추출하는 것에 있다. 그러나 이번 특별전의 기초가 된「이선생님 일가의 조사」는 그것과는 다른 목표가 설정되었다. 이 조사를 시행한 佐藤는,「생활재 조사의 목적은 인간이 살아가는 과정에서 주변에 모아진 사물을 가능한 한 조사하여, 그 하나하나에 소지하는 사람의 의미를 밝혀 나가는 것이다. 언제나 개성적인 존재로서의 인간을 그리고자 한 今和次郎의 원점으로 돌아가는 것이라고 해도 좋다」(2002「생활재조사 사물은 무엇을 말하는가」『도록 2002 년 서울스타일』pp.104-105) 라고 말하고 있다.

그리고 佐藤는「전시의 테마는 한마디로 말해「한국」과「가족」——중략——가족 한사람 한사람이 고유의 시간과 공간을 갖고 아파트의 방을 서로의 결절점으로 하여 주위의 세계로 나아가고 있다. 그러한 관계의 형태를, 한국도 일본도 아닌, 함께 같은 현재를 살아가는 가족으로 보고자 했다. 문화와 민족에 대해 말하기 전에 자신에 대해 알고 싶다, 가까운 인간에 대해 알기를 바란다. 거기서부터 개개인의 문제를 꾸려 나가는 것 외에는 미래의 열린 이문화 이해는 없다고 생각한다」(佐藤浩司 전술서:15) 라고 서술하고 있다.

「이선생님일가의 조사」는『가족』을 테마로 전시하였으며, 또한 논의를 위해, 지금까지 예를 찾을 수 없는 성과를 가져 왔다고 말할 수 있다. 그러나 또 하나의 테마「한국」에 대해 이「이선생님일가의 조사」를 활용하기 위해서는, 더욱 많은 각도에서의 지적, 논의가 요구되어질 것이다. 이번 심포지움의 목적은「이선생님일가의 조사」를 한국연구에 어떻게 활용할 것인가, 를 찾는 일이라고 할 수 있다.

4 심포지움에서의 논의

본 심포지움에서는 이하의 항목에 대해 논의한다.

(1)「이선생님 일가」조사 데이터의 상대화

이번 조사에서 무엇을 알게 되었는가, 한국연구자에 의한 한국의 다른 사례와의 비교를 통해 더욱 깊은 통찰이 가능할 것이다. 또한 그러한 논의를 바탕으로 이번 조사를 계속적으로 진행시킴으로서 조사 데이터를 충실히 만들 수 있다고 본다.

(2) 생활재 조사와 한국사회연구

「이선생님 일가」의 조사 유용성과 한계를 밝힌다. 그것으로 앞으로의 한국사회연구의 생활재 조사에 참고하도록 한다. 또한 예를들어 계층과 지역에 따라 한국사회의 평균적 이미지를 추출하는 한국판「생활재 생태학」조사의 가능성도 검토한다.

(3) 글로벌화와 생활문화

현대는 일 만으로 자신의 생활을 충족시키는 시대가 아니라, 산업화에 의한

환경파괴, 자원의 고갈등 지구 규모의 변동이 직접적으로 일상 생활에 영향을 줄 수 있다. 또한 그 생활은 타국과의 사이에 복잡하게 얽혀진 상호 의존 넷트워크 위에 세워져 있으며, 타국의 정세가 자국에 심각한 영향을 줄 수도 있다. 인간과 문화의 시점에서 생활을, 생활로부터 현대 사회를 보는 시점이 요구되어지고 있는 것이다. 특히 서브컬쳐를 중심으로 하이브리드가 진행되고 있는 일본과 한국 양국의 문화를, 종래의 양자대립과는 다른 모델로서 파악하는 일이 앞으로의 조사를 통해 검증될 수 있을 것이다.

마지막으로 본관의 잡지 「민박통신」에 국립역사민속박물관의 篠原교수가 박물관에서 행해지는 연구를 「를」과 「로서」와 「도」의 세가지로 분류하고 있다[9]. 「를」의 박물관학 연구는 바로 박물관 그자체를 연구하는 입장. 「로서」의 박물관 연구는 가장 중핵적인 것으로서 여기서 중심이 되는 것이 넓은 의미의 사물 자료이다. 그리고 「도」의 연구는 박물관 스탭으로서 박물관 자료 「도」 사용하여 겨우 박물관답게 도배하고 칠할 수 밖에 없는 연구이다. 나 자신은 바로 이 제 3 의 입장이며, 물건 자료는 먼 존재이기만 하였으나, 상설전의 리뉴얼에서 이번 특별전에 이르기까지, 물건 자료에 가깝게 다가갈 수 있게 되었으며, 물건자료 「도」 연구하게 되었다. 물건자료를 통해 생활을, 그리고 생활에서 현대사회를 파악하는 시점이 요구되어지고 있다고 생각한다.

5 맺음말——심포지움의 진행방법

심포지움은 깊은 논의가 될 수 있는 장이 되도록 한다. 하나의 셋션을 60 분으로 하여 (휴식시간을 넣어 10 분정도 연장가능), 발표자는 화제 제공 형태로 20 분 가량의 발표를 하고, 남는 시간은 토론이 될 수 있도록 한다.

진행자는, 토론이 심도있게 진행될 수 있도록, 논의를 정리하면서 진행시켜 나간다. 토론시간이 모자란다면 종합토론에서 다시 논의한다.

참가자는 시간등의 제약으로 발표하지 못한 의견, 질문등이 있으면 총합토론에서 논의해야할 항목에 대해, 이쪽에서 준비한 용지에 기입하여 제출한다.

심포지움은 고수현씨, 고정자씨에게 동시통역을 부탁하였으며, 일한 양국어로 진행된다.

그럼 활발한 토론 부탁합니다.

주

1) 「전시 평가——2002년 서울 스타일」은 2002년 10월 16일 본관 연구 간친회에서 이루어질 예정이다.

2) 「집 연구회」는, 이번 특별전을 계기로 일본의 생활재 생태학을 한국에 적용시켜 한국 생활문화를 연구하기 위한 모임으로서 2000년 7월에 결성되었다. 그 명칭의 유래와 활동은 다음과 같다.

한국어의 「집」이라는 말은 대략 두가지 의미를 갖고 있다. 우선 추위와 더위, 비바람을 막기 위해 지어진 물리적인 구조물을 나타낼 때 사용된다. 또하나의 의미는, 집은 사람이 이룰 수 있는 가장 최소한의 단위로서 가족이 생활하는 공간이다. 그러므로 「집」은 가족을 담고 있는 단순한 물리적 구조물뿐만 아니라, 가족이 속해 있는 문화의 다양한 모습을 반영해 주는 문화적 공간이다. 즉 「집」은 주거 (housing) 라는 건축물과 그 구성원을 나타내는 家口집단을 동시에 의미하는 말이다.

그러므로「집」에 대한 연구는 물리적 구조물인 집과 그 안의 물건 그리고 家口집단의 생활에 대해 총체적으로 조사할 수 있는 장점을 지니고 있다. 동시에 종래의 복식학, 식품학, 건축학, 민속학, 인류학등, 각자의 시각으로 연구해 온 집에 대한 연구 경향을 하나의 3차원적인 공간 안에 총합화시키기 위해 「집」이라는 용어를 선택한 것은 적절했다고 생각한다. 또한 미크로적 생활문화에 대한 연구에서도 「집」이라는 주체가 사회를 구성하고 있는 가장 기초가 되는 단위라는 점에서도 유용한 연구대상이 된다. 「집」과 관련한 학문분야의 연구 주제로는, 대략 의생활, 식생활, 주생활, 가족관계, 종교신앙, 의례생활등이 있다. 그런데 집이라는 공간 안에서 家口집단의 구성원들은 이러한 각각의 생활을 동시에 운영하고 있다. 따라서 「집」에 대한 총체적인 연구를 위해서는 위의 연구 주제와 관련한 학문을 학제적으로 연구할 때만이 바른 연구가 가능하다.

집연구회는 집이라는 공간 안에 「공간+사람+사물」의 문화적 메카니즘이 어떻게 상호작용하는 가에 대해 주로 연구했다. 집연구의 가장 기초적인 학문 경향은 인류학과 민속학이 견지하는 fieldwork를 통해서이다. 특히 같은 문화권 또는 다른 문화권 사이의 유사하거나 다른 집에 대해 「공간+사람+사물」을 통한 비교연구는 특정의 집이 속하는 문화권의 사회문화적 의미를 밝히는 데에 적절한 연구방법이라고 믿는다. 특히 fieldwork 자료를 앞에 두고 공동으로 분석하는 작업은 「집 연구회」가 갖는 가장 큰 장점중의 하나이다.

3) 공동연구회「한국 현대 생활문화의 기초적 연구」의 목적은 다음과 같다.

지금까지 일한 양국에서는 각각의 역사와 문화 연구는 이루어져 왔으나 현대사회의 생활문화 연구 및 이해는 거의 진전되고 있지 않다. 2002년이 양국 정부에 의해 「일한 국민 교류의 해」로 규정되어 이번 해에 본관과 한국국립민속박물관이 상호 생활문화전을 공동으로 개최하게 된 것은 일한 양국의 문화교류와 상호 이해에 있어 의미 깊은 일이다. 본 연구는 그러한 전시를 위한 기초적 연구가 목적이다. 동시에 본 연구는 한국 사회의 고도 경제 성장하의 인류학적 연구 및 「사물」을 통해 본 조선 민속문화라는 지금까지의 본관 공동연구를 바탕으로, 현대 한국사회의 생활문화를 의식주를 중심으로 다각적인 방향에서 조사·기록하여, 종래에는 없었던 한국사회 연구의 기초적인 데이터 베이스를 구축하고자

한다. 이것은 일한 양국의 생활문화의 동질성과 이질성을 밝히는 것과 함께, 한국사회의 일본 대중문화 개방을 비롯한 일한 양국간에 깔려있는 문화적 제문제에 대해, 새로운 시좌를 요구하는 일이 될 것이다.

4) 심포지움에서 이문웅교수가 「생활문화」라는 용어에 대해, 三木清가 1911년 1월 「婦人公論」에 「생활문화와 생활기술」이라는 타이틀의 문장을 썼다고 가르쳐 주셨다(『三木清全集』제 4권, 岩波書店,1967년에 所収).

5) 「생활」이라는 말을 사전에서 찾아보면, 살아서 활동하는 일, 생물이 살아가는 일상의 운영이라는 의미와, 생계를 꾸려나간다는 의미가 있다. 즉, 전자는 「살아있다」「용감하게 살아간다」라고 하는 기본적 욕구에 대응하는 생리적 부분이며, 후자는「잘 살아간다」라고 하는 문화적 요구에 대응되는 사회적·문화적 부분을 갖는다. 인간의 생활은 이 두가지 요소의 총합체이다. 「생활문화」라는 용어는 「생활」이라는 말 안에 들어 있는 「문화」의 요소를 강조한 것, 또는 「문화」를 생활의 사회적·문화적 측면을 가르키는 것이라고 한다면, 그것은 「생활」에 있어서의 후자의 의미가 된다고 생각한다.

한편으로, 「문화」라는 말은, 문화인류학에서는 「생활양식」을 총칭해서 사용될 때가 많은데, 사용 방법에는 몇가지 종류가 있다. 첫째는 포괄적 파악으로서, 「사회 성원으로서의 인간이 획득한 지식, 신앙, 도덕, 법, 관습 그외 모든 능력과 습관을 포함한 복합적인 전체이다」라는 타일러의 고전적인 정의로 거슬러 올라간다. 그 후, 그러한 타일러의 정의를 「문화의 재산 목록 나열에 불과하다」라고 비판, 「문화는 역사적으로 창조되어진 생활양식이다」라고 본 Kluckhohn, 문화의 기능 분석을 행한 Malinowski, Radcliffe=Brown을 거쳐, 많은 인류학자들에 의해 「문화」의 분석이 이루어졌다. 거기에는 포괄적인 파악 방법 이외에 문화를 자연 환경에 대한 적응 체계로서 보는 관점, 문화를 관념체계로서 파악하는 입장, 문화를 상징체계로서 보는 입장등이 있다. 여기서는 그것들에 대한 언급은 하지 않겠으나, 「생활문화」용어가 쓰여질 때 가장 많이 사용되는 것은 타일러와 클락혼의 정의를 빌린 포괄적 파악 방법으로서의 문화를 보는 입장이다.

6) 石川가 제시한 「생활문화」의 구체적인 내용은 다음과 같다(石川実 1998: 11).

(1) 비형상적생활문화: ①지역의 독특한 토착 사상 ②국어·방언(단어)·인터네이션 ③토착신앙 ④생활의 지혜 ⑤기능·예능·무용(형상화된 작품을 제외)

(2) 형상적 생활문화: (2)-1 신체적 형상=①자기표현으로서의 신체 가공(예를 들어 화장) (2)-2 표상적·造影적· 造形적형상=①민요 ②공예품 ③도구 ④공구 ⑤건축물등

(3) 제도적 생활문화: ①제스추어와 몸 동작 ②행동양식(걷는법, 앉는법, 시선등) ③일상적 관습(예를 들어 하루에 몇번 식사하는 것이 통상적인가, 식료의 선택, 조리법, 사용식품, 음식장식등의 방법, 먹는법, 의류의 재료 그외 장착 방법, 거주양식등) ④메너·에티켓(인사등의 예절법, 증답습관, 연중행사, 통과의례, 관혼상제와 그에 따른 증답의례등) ⑤어른 및 어린이들과 관련된 놀이습관 ⑥관계 양식(협력·협동양식·상하관계·대면적 관계의 물리적거리와 위치를 정하는 방법, 감정표현의 패턴등) ⑦지역내와 가정내의 지위 분배 및 역할 설정 ⑧조직화의 원리와 집단의 형태(가족관계 및 가족구성의 형태와 운영방법) ⑨지역공동체 구성의 형태와 운영 방법 ⑩여러가지 집단등.

이번 특별전에서는 「민박시장」「민박마당」을 포함하여 이러한 여러가지 내용을 담은

「생활문화」 전시를 시험해 보았다.

7) Minpaku Anthropology Newsletter의 본 심포지움 소개 기사에는, quotidian culture라고 번역되어 있다.

8) 민속학의 입장에서도 최근 印南敏秀·神野善治·佐野賢治·中村ひろ子編『사물·모노·物의 세계——새로운 일본 문화론』雄山閣, 2002년이 간행되었다.

9) 篠原徹 2000「뮤지엄·숍의 고현학」『민박통신』88: 4-20.